

極早生温州の台木による生産安定技術

農業研究センター 果樹研究所 常緑果樹部

研究のねらい

消費者の高品質、嗜好の多様化に対応するため、多くの品種系統が育成・選抜されているが、樹勢の強弱により栽培面で支障をきたしているものもある。特に極早生温州の多くは樹勢が弱く生産性が低いため、比較的樹勢が強いとされている台木を用いて、栽培性に及ぼす効果について検討する。

研究の成果

- 1.昭和59年4月に播種したシイクワシャー、福原オレンジ、川野なつだいたい、ナツダイダイ、柚、座ダイダイの実生苗を用いて、60年9月に市文早生、宮本早生、山川早生を芽接ぎし、苗木を育成した。63年6月に、2年生苗を圃場に定植し生育状況、果実品質の推移を調査した。
- 2.各種台木とも新梢の発生が旺盛で、カラタチ台に比べ新梢の伸び、樹容積、幹周と大きく樹高率が高かった。
- 3.定植後1年目(1989年)の着花は、カラタチ台が多かったが、2年目以降はやや隔年結果性はみられるものの着花量には差がなかった。収量は台木による差がみられ、3ヶ年間の累計収量では、市文早生、山川早生で福原オレンジ台が最も多く、次いでシイクワシャー台でカラタチ台より多かった。
- 4.宮本早生では、シイクワシャー台が最も多く、福原オレンジ台、ナツダイダイ台、アマナツ台はカラタチ台よりやや多い程度であった。
- 5.果実の着色はカラタチ台と同程度であったが、果実の外観はカラタチ台に比べ各台木ともやや粗い傾向にあった。
- 6.果実品質では、各台木はカラタチ台に比べ糖、酸とも低い傾向にあったが、カラタチ以外の台木間の差は認められなかった。
- 7.以上の結果から、品質面においては樹勢の強い台木は、近年の高品質果実生産の流れには逆行する面もあるが、マルチ、根域制限、高畝等の新栽培技術を併用することによって、品質面は克服できるものとみられる。なお、台木によってはCTVの感染による樹勢低下や枯死がみられるため、ウイルスに対する注意は十分に行う必要がある。

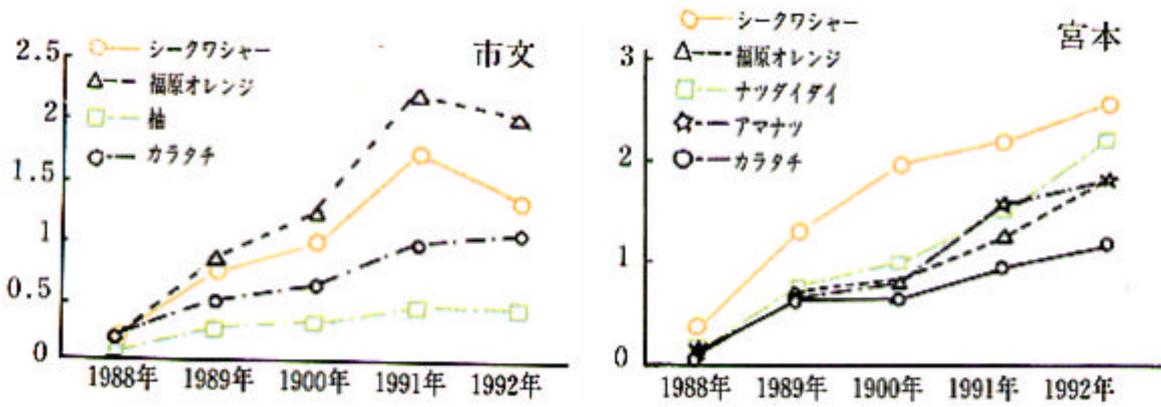


図1 台木別の樹容積の推移

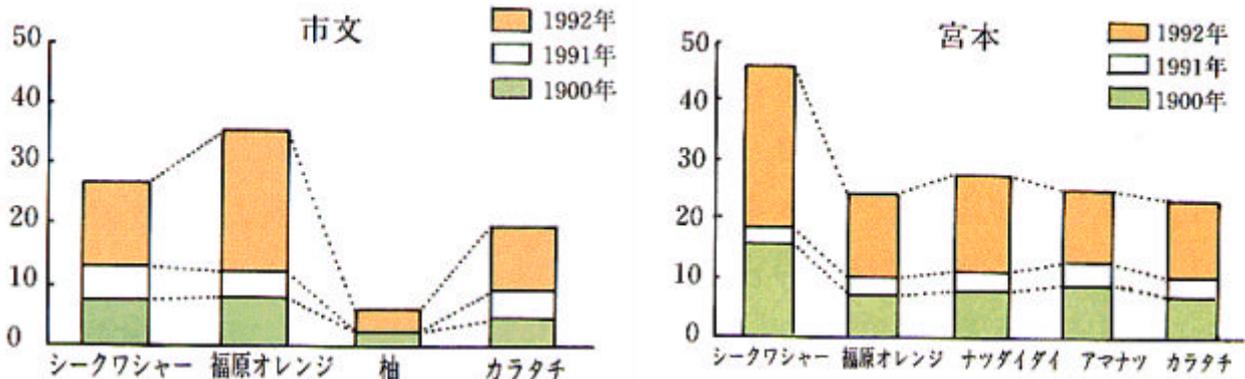


図2 収量の推移

表1 果実品質(1990~1992年の平均値)

系統	台木	果肉歩合	B r i x	クエン酸	甘味比
市文	カラタチ	80.2%	8.2	0.84	10.96
	シーカーシャー	76.6	7.9	0.77	11.55
	福原オレンジ	80.8	7.7	0.81	10.70
	柚	74.8	8.0	0.85	10.77
宮本	カラタチ	78.6	8.9	0.87	11.36
	シーカーシャー	76.0	8.4	1.10	8.74
	福原オレンジ	76.5	8.4	0.80	11.50
	ナツダイダイ	77.0	8.5	0.77	12.11
	川野ナツダイダイ	77.8	8.2	0.79	11.60
山川	カラタチ	78.0	8.4	0.91	10.02
	シーカーシャー	79.5	7.7	0.79	10.90
	福原オレンジ	79.5	8.1	0.78	11.68